

「イスラーム金融セミナー」開催報告

福田安志

アジア経済研究所は早稲田大学大学院ファイナンス研究科と共催で、二〇〇九年七月二四日に「イスラーム金融の現状と可能性」と題した公開セミナーを開催した。

セミナーではメイン・スピーカーのムハンマド・カッターン氏（クウェート大学経営学部イスラーム経済研究ユニット長）が「GCC諸国におけるイスラーム金融―最近の指標の示すもの」と題した講演を行った。また、吉田悦章氏（早大客員准教授、国際協力銀行調査役）が「イスラーム金融の最新トレンド」について講演し、福田は「GCC諸国の経済とイスラーム金融」について報告した。

セミナーはファイナンス研究科の日本橋キャンパス・ホールで開催され、金融機関関係者、研究者、マスコミ関係者などが多数参加した。以下に、セミナーが関心を集めた背景について述べ、続いてカッターン氏の講演の要旨を整理し紹介する。

●セミナーへの関心

現代のイスラーム金融は、一九七〇年代半ばにGCC（湾岸協力会議）諸国でイスラーム銀行として始まった。イスラーム銀行はその後、中東やアジアのイスラーム諸国を中心にして世界に拡大した。金融分野も広がり、スラーク（イスラーム債券）や

タカフル（イスラーム保険）をはじめとし、様々な金融分野に應用され、各国経済のなかで重要な役割を占めるようになってきている。欧米諸国でもイスラーム金融に取り組み金融機関が増加し、わが国でも関心が高まっている。

そのイスラーム金融にとって二〇〇八―〇九年は真価が試される年であった。イスラーム金融は誕生間もない新しい金融分野で、これまで金融危機のような大きな試練は経験していない。しかも、金利を避けるために独特な手法を用いて金融活動を行っており、金融危機の荒波にもまれるなかで、イスラーム金融にどのような影響が現れるか関心が集まっていた。

また、GCC諸国の経済は石油収入に大きく依存している。二〇〇八―〇九年にかけて原油価格が大幅に下落し、各国の石油収入が半分以下に落ち込むなかで、イスラーム金融も大きなダメージを受けているのではないかと懸念が強まっていた。

イスラーム金融はイノベーションを重ね新しい分野を開拓し発展してきたが、マレーシアと並ぶ世界のイスラーム金融の中心地であるGCC諸国における今後の方向性への関心も高く、現地研究者の報告に関心が集まったのであった。

カッターン氏の講演要旨

●発展するイスラーム銀行

イスラーム銀行の発展には目を見張るものがある。世界の主要なイスラーム銀行一〇〇行の年平均成長率は二六・七%と高く、多くの国で通常型の銀行よりも良い実績を残している。また、中国でZinshiba銀行がイスラーム金融のサービスを始めるなど、これまでイスラーム銀行がなかった地域への拡大も続いている。世界のイスラーム銀行の資産も増加しており、今後数年以内に四兆ドルの産業になると予想するものもいるほどである。

GCC諸国でもイスラーム銀行の発展が目覚ましい。クウェートについて話すと、初めてのイスラーム銀行であるクウェート・ファイナンス・ハウスは三〇年前に始まった。当時はイスラーム銀行について知っている人はほとんどいなかったが、その後の発展は目覚ましく、資産総額、預金額、マーケットシェア、支店数などで通常型の有力銀行と肩を並べるほどになっている。イスラーム銀行は人々に受け入れられ発展してきたのである。

GCC諸国のイスラーム銀行の資産合計は一九九七年の二〇〇億ドルから二〇〇七年には一七三四億ドルと九倍近くに増加し



発表するクウェート大学
カッターン教授

ている。今後も発展し、GCC諸国全体では一年には預金の五〇％を占めるようになる」と見られている。

クウェートには七行の通常型銀行がある。その内五ないしは六行は中央銀行にイスラーム金融の免許を申請している。通常型の銀行の多くが業務の一部または全部をイスラーム銀行に転換しようとしており、イスラーム金融は二、三年の内にGCC諸国での金融ビジネスの中心になる。

●金融危機の影響は

GCC諸国では金融危機を受けて経済が悪化し、とりわけドバイでは経済が大きなダメージを受け、イスラーム銀行にも相当な影響が現れている。

しかし、ドバイなどの一部の例を除けば、全般的に見ると、金融危機のイスラーム銀行への影響は思ったよりも強くはない。しかも影響は通常型銀行よりも遅れて現れている。イスラーム銀行は現物資産に依拠して金融を行っており、アメリカで問題になったような金利に基づく証券化商品などを利用することはなかったこともあり、影響は通常型銀行におけるよりも少なかったのである。

通常型銀行と比べても金融危機で失った資金は少なく、資産の伸びこそ鈍化したものの、現在でも十分な資金を確保している。今後の業績回復に向けて良いポジションにあるといえよう。

二〇〇七年に設立されたヌール・イスラーム銀行ではドバイ政府が有力な株主に

なっているように、最近設立されたイスラーム銀行では政府が株主となる例も多く、銀行の信用を補強している。

イスラーム開発銀行（IDB）、イスラーム諸国機構（OICの下部機関）の総裁も今年七月の講演で、イスラーム銀行はこれまでどのところの影響を受けていないと述べている。金融危機の影響を心配する必要はないであろう。

●銀行以外のイスラーム金融の動向

スクークは近年大きく発展成長してきたが、金融危機などの影響を受け、昨年来、発行総額は減少している。世界的に見て、スクークの発行額は二〇〇七年の四〇〇億ドルから〇八年の二〇〇億ドルへと半減した。スクークの形態で見ると、〇七年と〇八年を比較するとムシャラカ方式（共同所有・共同事業方式）が減少し、シヤール方式（リース方式）が増えている。これらのことの背景には、金融危機などの影響でスクークに向けられる資金の流動性が減少したこと、イスラーム法の観点からある種のスクークの適法性について議論があったことなどがある。

最近の動きとして、バハレーンで今年六月に七・五億ドルのスクークが発行されたが、応募は五倍あった。サウジ電力会社も五月に一九億ドルのスクークを発行している。スクーク発行の動きが再び強まっており、今後に期待できよう。新しい流れとして、アメリカでスクークの購入が増えていることも今後を占ううえで注目される。

（もつとも、吉田悦章氏は、セミナーの中でクウェートの Investment Dar 社の発行したスクークが最近デフォルトになったことを指摘しており、スクークをめぐる状況はまだ安定していない。当面、動向を注視していくことが必要と思われる。）

タカフルも、まだ規模は小さいが、成長著しい分野である。GCC諸国では、非イスラームの保険よりもイスラーム保険のほうが伸びが大きく、タカフルのマーケットは年四〇％で拡大している。クウェートには三〇の保険会社・代理店があるが、その内一はタカフル会社である。GCC諸国では人口増加が大きく将来が期待できよう。投資信託などのイスラーム・ファンドの伸びも著しい。GCC諸国を含むアジアにおけるファンドの資産合計は二〇〇七年には二六七〇億ドルであったが、〇八年には七三六〇億ドルと急速に増加している。

しかし、金融危機の影響を受け、株式や不動産投資を目的とした多くのファンドの収益状況は〇九年にかけてマイナスになっている。新規に設定されるファンドの数も二〇〇六―〇七年には合計二七一であったが、金融危機の中で大きなダメージを受け二〇〇八―〇九年第1四半期には八九にまで減少している。

GCC諸国におけるイスラーム金融を取り巻く状況には厳しい面もあるが、今後、経済が回復していけばイスラーム金融はさらに発展していこう。

（ふくだ さだし／アジア経済研究所
図書館館長）